



李仙碍建言第五十号

從第七說
至第八說

8
31



414
A4452



大正十一年四月
侯爵邸寄贈

立憲度

英國式ハ魯國ヲ除クノ外他ノ外國於テ亞
細亞州中ニ所領ヲ得ルノ際日本ノ獨立ニ
危害トナルヘキヤ否ヲ論ス

千七百六十年即千七百五十年前ニシテ「ベトナム」
大帝ノ世ヲ去リシヨリ三十五年ノ後巴里ノ大
學校ヨリ金星ノ經過ヲ測量ノ為メ「トホルスク」
ノ地ニ「シヤプト」稱スル人ヲ送リシ時全氏ハ途
中魯國ヲ經テ該地ニ到リ「當」ノ旅行記事ニ
多ク魯國ノ地ヲ見聞セシ事ヲ述
魯國ノ武威

飛翠

大藏省

擴張スルヤ恐ラクハ歐羅巴各國ノ盛衰ニ關係
スヘキ事ヲ載セタリ此ハ全氏ペリトル帝ノ
大望ヲ未タ熟知居ラサリシヲ考フレバ其説ハ
實ニ驚クヘキ先見ナリ全氏ノ説ニ曰ク歐羅巴
方今ノ形勢ヲ見ルニ魯國ハ其隣國即チ日耳曼
全國ノ為メ最モ恐ルヘキ國ナリ魯國ハ何レノ
土地ヲ問ハス争鬪ヨリ得ル所ノ地ハ富饒ニシ
テ魯國ノ失フ地ハ沙漠ノ外他ニ失フ所ナシ
國ハ大軍ヲ有レ其兵士等ハ掠奪ヲ專ラ好ムカ
故ニ早晚出

取ヲ計ルヘシ全國ハ季候ノ

嚴ナルヨリ其 自然ト温度ノ地 出入スル
ノ勢アリ且歐羅巴ハ其内乱ヨリ各國相敵視シ
屢分合アル地ナル中ニ魯國ハ上等ノ地位ヲ
メリ 歐羅巴各國ノ一般同盟シテ連合スル事ハ
恐ラク無カルヘクシテ其國々ハ當今魯國於テ
專ラ壓屈セシムル國民ノ盛衰モ曾テ之レヲ顧
ミズ加フルニ魯國ヲシテ各國ノ争議ニ居間セ
シムルナリト又曰ク歐羅巴各國ハ其人民ノ自
由ヲ妨ケ自國君主ノ專ヲ保ムセントセリト
既ニ魯國ハホラント國ヲ王國ト為シ不日ニシ

飛

歳

于其從屬トナサン事明白ナリ
 而シテ君主ノ異
 ナルノミニテ人民ニ於
 損益
 及ニ
 澳地利、キリ、
 印度等ノ如キ
 三耳拾支那
 ヲ魯國ノ版圖ニ入
 レント計ルノ際前書從屬ノ國々ヲシテ勢援セ
 ンムルナルヘシ然レバ未タ自國ノ法律ヲ貴重
 スル國民等アリテ其國ヲ保護スルノ富ヲ有シ
 正當適宜ノ治下ニ其幸福ヲ期セントスルノ國
 々ハ互シク其國々合併シ魯國ノ五十年來
 羅巴ニ威ヲ振ハントスルノ策略ヲ制限シ其頂
 防ヲ与ナレ
 ラハト

ホラント
 獨立ヲ歐羅巴各
 方テ助
 セハ魯國ノ歐羅巴州ニ伸擴スルヲ防キ全
 州ヲシテ安全ナラシムヘシ蓋シ此
 保ツハホラント國ノ獨立ニアルノミ又千
 五百年代ホシガ
 國ノ土耳拾ヲ襲ヒシ
 カ如ク全國ヲ以テ魯國ヲ進撃スルヲ得ヘ
 シ
 此學戈アル天文書ノ先言誤ラズ
 見ルヲ得タリ若國民其カ位ス
 所ノ形状ヲ及
 高量シ一般ノ事情ヲ採リ預
 將來ノ定見ヲ

立ツル時ハ委巨多ノ災害ヲ避ルヲ得ヘシ曾
 テ耶蘇降誕前百二年マシメシガ代北方ノ人民
 ナルシムブラス人伊多里国ヲ襲撃スルニ方リ
 羅馬人ハマソンノアラサルヤ否其国地ハ片々
 破碎センコヲ先見セサルヲ得ズ然レトモ此先
 見無ク終ニ其國滅亡ニ至レリ今八百五十年英國
 獨逸ニ澳地利ノ三國合併シ佛国ヲシラナホル
 ナン大帝ノ奇戈ヲ用ヒシメ魯國ヲ攻撃セシ
 ラ魯國ハ一時分裂シ今日歐羅巴ニ脅迫セ
 如キ危難ヲ預防セシナルベシ

ろ

アバトシヤン 教 以テ現今ノ 小ニ必道
 不レニアラス然レトモ今日ノ如ク國家變遷ノ時
 ニ除シ歐羅巴各國ノ事跡ヲ以テ日本ノ大ニ作
 ル処ノリテ現今日本ノ平穩ニ安シ彼ノ各國ノ
 如ク將來ヲ誤ラサルヲ希望スル所ナリ
 故令歐羅巴各國ノ現今魯國ヨリ脅迫セラレ其
 危害タルヲ歐羅巴ニテ知ルト知ラサルトニ関
 ラス何等ノ事變アルモ日本ハ直接ニ危害ヲ受
 クルノ憂ハ甚ク少シ然レモ 幸福ニ
 於テ間接ニ觸ル所ノ 如何ヲ推考スルハ當
 不 概

國ノ為必ス危害ナシ氏言ニ難
 車輪魯國ノ方ニ廻轉ス
 英領印度ノ葛藤ヨリ實際歐羅巴ニ於テ國力ノ
 權衡ニ関シ而ノ此事變一度生スルニ至ル時ハ
 現今他ノ強國中ニ存スル安全ノ意忽チ轉シテ
 一大憂愁ノ意ヲ發起スヘシ此國力ノ權衡ヲ保
 存センニ只一策アルアル氏各國平常ノ不注意
 ヲリ此策ヲ施シ得サルヘシト考フ此舉タルヤ
 既ニ十ホレガシ第 世ノ千七百九十八年
 テハ「ゲ」ト曰 入撃ハルノ際彼「」ハ「合」

セハ必然
 同至畧取ノ後ハ細心及
 ナトスルノ策タリ此策ハ巧ミニ遂ル時ハ
 カノ權衡ヲ保存スルヲ得ルナリ之レヲ再考シ
 テ曰ハ、各國ノ保有スル全軍ヲ東洋ニ運輸シ
 支那ヲ畧取シ而シテ其國ヲシテ歐羅巴州ノ盛
 衰ヲ決スルノ地トシ同時ニ各國於テ東洋ニ其
 所領ヲ得ルナリ假令得ル処ノ所領英國或ハ魯
 國ノ所領ト比較スルニ足ラサルニ高貿易ノ便
 ヲ為シ又必用ノ時機ハ陸海兵此管所トシ用
 用ユルヲ得ヘシ若前書ノ事壹萬一是ルノ時ニ

アラハ今日推察スルヨリモ一層重シク事ニ涉ルヘケレバ日本於テ空しく注意アラシク予カ希望スル所ナリ

歐羅巴ヲ問ハス亜米利加列タリ共又亜細亞列タリ共獨立ノ各國群集スルノ地ニ於テ各其國ノ獨立ヲ保存シ或ハ其獨立ヲ欲スルノ國ハ何等ノ事故ヲ論セス其群國中一ヶ國ノ國カ非常ニ廣大トナリ或ハ外異ノ種屬浸入スルハ其洋國一般ノ為メ危害ヲ及スルノ理ナリ其第一解ク群國中 非常ニ國カヲ張ル 事

生ニヘテ危害ヲ避クニハ 國カ權衡 稱スル 盟ノ約ヲ結フニアリテ既ニ千八百十五年ニ歐羅巴於テ之ヲ企テリ且第二ニ解ク異族ノ侵入ヨリ生スル害ヲ公平ニセンニハ 大統領モンルノ 亞米利加於テ發言セル新世界 亞米利加ノ 事件ニ古世界 歐羅バノ國々於テ決シテ立入ルヘカラストノ條理ニ基カサルヲ得ズ然レバ大統領モンルノ發言ヤシ規則ハ歐羅巴ニテ國カノ權衡ヲ定ムル為メウチヤナ 府ニテ 取結ヒタルモノニ違ヒ只之ヲ一ニシテ 政府 意

トシ臨時ノ形勢ヨリ發言セシモノト也故シ普
 通ノ法則ニシテ萬國ノ許可ヲ得サリシナリ
 ナボレカニ大帝ノ佛國ノ帝位ニアルヤ凡
 十ケ年ニシテ其間全帝不測ノ釁カラ有シ
 歐羅巴各國ノ衰亡此時ニ迫リシカ故各國
 ノ君主同盟ノ約ヲ結ビ終ニ此大勇士ノ敗
 ラ来シ尋テ歐羅巴各國中國力ノ權衡或ハ
 國勢ノ平均ヲ立ントノ意ヲ起發スルニ至
 一リ此目途ヲ定セシニハ各國ノ廣狹ニ
 成干等ニシテ必ラズレハ其國ノ兵備ト

權衡シ各国内一國ヲシテ他國ノ上ニ立
 タシメス或ハ一國ヲシテ他國ノ獨立ヲ害
 スル能ハサラシムルノ地位ニ置カサルハ
 コラス此所分タルヤ各國ヲシテ各其舊來
 ノ權利ヲ保有セシメ國家安寧ニ歸セシム
 ルノ策ニシテ「ウヤナ」會議ニ於テ始計シ
 タル至難ノ事件ナリ澳地利ノ伊多利北部
 ヲ蚕食セシト魯國ノ歐羅巴中心ニ進入セ
 シトヲ斟酌シ盡漏出ノ領知ヲシテ佛國ノ
 境界増加シ亦國ノ旧領内ニ減縮シ其北

飛

以

部ニ於テ新國ヲ建シ而シノ日丹曼聯邦
各自ノ力ヲ以テ大體ヲナシ得サル貧弱ナ
ル王國英侯國ニ以テ集合セシメ又其聯合
セシ國々合併スル時ハ充分強ヲ示スニ足
リ其聯邦ノ永續スヘキ國ノミヲ存スルヲ
許ス

西班牙國英葡萄牙國ハ海外ニ所屬アリテ
富タルカ故ニ歐羅巴於テハ所領ヲ増加セ
ス然レバ瑞典國ノ如キ那威國ヲ合併シ
大國ト成ル國ハ又此會議ニ列席スル

許可セシ僅ニシシリ一島ノミ其領地ヲ
減少セラレシ多利亞國王ヲシテ再ニ年多
里國ノ旧領ニ復サシメタリ
サイントアルライヤンス神監ト稱スル条
約ヲ千八百十五年七月二十六日巴里ニ於
テ魯國澳地利英法諸國トノ間ニ取結ビ就
中此條約ノ主宰タリシ君主ノ間ハ一層其
結約ヲ厚クシ他國ニ於テニ數月ヲ出ス
シテ此條約ニ同盟セリ之
新定條約ニ稱シ耶蘇ノ宗

情アル政府并司君之レ

サルモノセテ然レ氏人ヲ守ラ

テ忽チ此約定趣旨廢物ニ属セリ

今日ニシテ政體ヲ確定スルノ日至レリ如

何トナレハ君主專制ノ經驗ヲ経テ初メラ

衆庶自由ノ理并君民同治ノ原理ヲ想像ス

ルニ至リ此ヲ議ヨリウヤナレ府ニ於テ決

定セシ情實トハ歐羅巴各國ノ形勢大ニ變

化シ人類自由ヲ稱スルモノ倍蔓延シ此

南亞未利加諸列ハ自然ト世界ノ奴

大

日

タラ脱シ自ラニ十ヶ国ヲ建シ

ハフニナル國ヲ失白耳義和黨ト分裂

シテ獨立ノ王国ヲ建タリ又ギリースノ上

國建テリ而シテ各所自由出版ノ漸々蔓延

シ蒸氣電信并鐵道等ノ發明ヨリ政府ハ旧

來施マシ所分ヨリモ百事人民ノ意望ヲ多

ク取ラサルヲ得サルニ至レリ然レ氏反令

政府ノ体裁及人民ノ風俗ニ於テ斯ノ如

キ變化ヲ生セシト雖氏固ガ權衡ノ條理ニ

於テ依然ト現存一リ十八百十 問

飛

大

在世マハ帝王ノ自マノ権理ヲ防
為メ施款スルシモ、
民ノ権理ヲ防禦スル為メ之レヲ適用マサ
ルヲ得ス

尚詳細ノ事ハ「フロントキリス」著萬國公法
九十五葉ヨリ百一葉及ヒ千八百六十六年
出版ノ「ウキト」著萬國公法八十四葉ヨ
リ百十二葉ヲ見ルヘシ且モ「ル」法則ノ
條理畧説ハ千八百六十六年出版ノ「ウキ
萬國公法百一十二葉ヲ見ルヘシ

英國或ハ魯國ノ亞細亞州中於テ非常ニ其權威
ハ振ハン一若シ亞細亞大陸ニ在ル獨立國ノ為
ト憂思ノ一大根原ナリト今日知覺スル時先
キニ述フル第一ノ根理ニ隨ヒ他ノ外國ノ侵入
シテ英魯ニ等シキ憂思ヲ生シ来サンヲ防機ノ
方策ヲ以テ預メ之ヲ防グ事亞細亞州中各國ノ
最利益ナルヘシ而シテ第二ノ根理ニ隨ヒ歐羅
巴或ハ亞米利加州、
得ントスルヲ可成坊ク、
亞米利加州各國ノ歐羅巴州中於テカ久ク於テ

飛躍式

大義

三

碇泊所ヲ得ルナクシテ其海軍ノ自由ニ出入
 ルヲ得ルカ如ク同様ニ碇泊所ヲ得ルナクシテ各國
 ニ與ヘナハ充分ナルヘシ而シテ此後亞細亞州
 ノ事務ニ付西洋各國ヲシテ立入ラシムルノ便
 益ヲ許ス事無ク現今亞細亞州各國ニテ許セル
 開港場ノミニ限ルヲ以テ良策トス是等ノ事ニ
 日本ノ深慮スルハ無益ナリト考フルモノアリ
 曰ク當今既ニ東洋於テ船舶碇泊所ヲ有スル國
 々ハ素ヨリ攘斥スルヲ得サレバ此國々ヲ除ク
 外他ノ歐羅巴各國ノ内東洋於テ碇泊所ヲ望ム

ノ國無ノ而シテ現今東洋ニアル其國々知ラ所存
 ムル國々ハ既ニ教國ヲ有スレバ此他ニ要需ヤ
 サレハ懸慮スルニ及ハサルナリト假令領地ヲ
 得ントスルノ國アルモ只國家ニ重任ナラスシ
 テ浪費無キ地ヲ望ミ全ク其高船兵海軍ヲ為メ
 修船所トスルニ充分ナル港ヲ欲スルノミニシ
 テ他ニ大望アル事無シ而シテ其港タルヤ多ク
 陸海軍ノ屯營トシテ用ユルヲ得ヌ又傳教師ノ其
 宗教ヲ擴ムルノ利益ヲモ為スヘカラサレハ決
 シテ國家ノ危害トナルヘキニ理ナシ加フルニ

其得ル所タルヤ萬國互ニ相益スル所ノ貿易盛
 大ヲ導クナレハ之ヲ許ス、害無カルヘシ結
 局若日本ニ於テ斯ノ如キノ場所ヲ得セシハル
 ラ否ハ時ハ萬國ノ嫌疑ヲ抱キ日本ノ為只損害
 ナルアリテ寧ロ之ヲ避クルニ如クハ無シト
 左ノ説ハ千八百四十三年十一月九日佛國
 於テ高名ナル政事學者「ギノ」氏ノ外務卿
 タリシ時支那ニ在ル同國ノ公使テラケレ
 シウ氏へ寄セメル私書ナリ 此以下佛文
 テラケレト云既ニ知ル如ク國產ハ我國買

易ハ利益ヲ保護シ且ツ要用ノ節ハ之レヲ
 防禦ナル為支那海ニシテ印度海ノ内ニ海軍
 隊ヲ在勤セシメント決定セリ
 然レハ佛國ハ現在前書ノ海内ニ於テ其海
 軍隊ノ船舶ヲ裝船シ武器食料等ヲ積入レ
 破損所ヲ修理シ病人ヲ上陸セシムル等ノ
 場所ヲ所有セス故ニ葡萄牙領マカラ或ハ
 英國領ノ香港或ハ終ニ西班牙領ノロソン
 島ナル「カウ」等ノ造船所ヲ以テ佛國海
 軍隊ハ碇泊所ニ食料積入所トシ依頼セサ

ルヲ得ス

此景状ヲムテ安ニテ待、曾テ歐羅巴
 州中ノ他国ニ於テ亜細亞ニ所領ヲ有スル
 以テハ佛国ニ於テモ東洋中一ヶ所ヲ得サ
 ルヘカラス而シテ支那海内ニ在ル我國船
 船ノ便利及ニ救助ヲ為シ得ヘキ安全ナル
 場所ニ我佛国ノ旗章ヲ揚ゲサルヲ得ル故
 ニ英國ニ於テ香港ヲ所置セシ如ク我國於
 テモナルキス、而ニ其所置ヲ施シ同所我
 海軍ノ武庫ヲ貿易ノ市場ニ建ツルヲ心需

トス其之レヲ建ツルノ地ハ實地種々ノ便
 ニ有セサルヲ得ス○第一ニ支那帝國ニ
 隣ナルヘキ事○第二ニ港内廣クシテ良
 鎖包シ該地近海ニ屢ナル大風ヲ安全ニ避
 テ得ヘキ土地ナルヘキ事○第三ニ雖レメ
 ル土地ニテ防禦ニ易キ地ナルヘキ事○第
 四ニ健康ナル氣候ノ地ニシテ熱帶地ノ暑
 ラ受テタル水夫等ノ病ヲ速ニ全快シ能フ
 ヘキ土地ナルヘキ事○第五ニ清水多クシ
 テ船舶ノ為充分ニテ供シ能ヘキ土地

ハナハスキ事此企謀ノ結果ヲ得トハ最秘
 密トスヘキヲ載セリ而シテテラクレイ
 氏ハ私カニ航海陸軍兵貿易ノ為ニ便ナル
 地ヲ探索若シ一箇ノ地アリテ其場所ハ一
 般ノ目途ニ適當スルノミナラス領主兵人
 民ノ意善良ニシテ容易ニ其地ヲ得ヘキ事
 ノ報ヲ得レハ速ニ其地ニ至リ獨立国ナレ
 ハ其酋長或ハ政權ヲ有スル君主ト讓受ノ
 事ヲ談判シ佛国政府ノ特許ヲ得ル迄ノ間
 假ニ其地讓受ノ約ヲ取結フヘシト加之全

35

事情止ムヲ得サル節ニ限レテ若此企謀ニ
 付他國ニテ聞知セシト察スハ充分ノ證ト
 アラハ前書ノ島ニ佛国ノ國旗ヲ引揚ヘ
 事ヲモ許可セリ

其後全氏佛国議院ニ於テ海外ニ船舶碇泊
 所ヲ得ンカ為佛国政府ニ於テ施ス所ノ舉
 働ヲ辨白シテ曰ク佛国ノ海軍碇泊所ヲ得
 ント計ル拳働タルヤ只太平洋ノミナラス
 世界何レノ場所ニ於テ之レヲ計ルモ適當
 ナリ之レ佛国ノ施スルヲ得サル処ニシ

即チ我海軍ヲ盛大ニスルノ目途ナリ何
レノ場所ヲ問ハズ貿易盛大并開化ノ大市
ヲ為ス場所ニ於テ佛國ハ此類ノ船舶碇泊
所ニシテ實地戦争ノ益ヲ為サスト雖凡保
護并防禦ノ便アル場所ヲ見出サ、ルヲ得
カルナリ

前文ノ議ニ答テ曰ンニ人類ト人類トノ間ニ有
ル如ク國民ト國民トノ間ニ有益ナル交際ニ保
存スルハ相互ナリ故ニ日本ニ於テ歐羅巴或
亞米利加國民ヨリ前ニ等シキ船舶碇泊所ヲ乞

テクルノ要需無キ以上ハ歐米各國ニ於テ之レ
ヲ又日本ニシテ受クルノ理無シ日本ハ其國
ノ港ニ所有スル貿易ノ利便ヲ外國ニ與フハ素
ヨクニテ尚一層其國々ニ對シ懸信ヲ表スル確
証ヲ供スルヲ得ヘシ然レ凡船舶碇泊所何ナ
ル狭少ノ地ト雖モ之レヲ許可スル時ハ未タ預
定シ能ハサル景状ヨリ尚其地ヲ擴張スル事ヲ
得ルモノナリ故ニ現在ノ危害ヲ包含マサルモ
之ヲ許スハ實ニ大ニ憂害ノ原因トナルナリ
何トナレハ今日信友タル國民モ明日仇敵トナ

ル事アレハナリ加フル。今一言アリ若其所領
 ラ保有スルニ入質モ無ク國家一擔負セル責任
 ラモ帶ナル時ハ歐羅巴各國カ海外ニ於テ其領
 地ヲ擴張スルヨリ他ニ望マシキ事アラスシテ
 其之レヲ得ルニ於テハ歐羅巴中最小國ノ一々
 ル英國ノ如ク東洋ニ國威ヲ示ス得ヘキ事人ノ
 知ル所ナリ既ニ第四十二号建白ニ詳明セシ如
 ノ「^ノ」ホレオン「^ノ」第三世ハ實ニ其國威ヲ張ラシ
 蓄祭シ千八百五十八年「^ノ」カイゴン「^ノ」ヲ其版圖ニヤ
 ン事ヲ決意セリ「^ノ」カイゴン「^ノ」ア「^ノ」チエリ「^ノ」國ト等

名

ク經濟上ニ於ルモ又政務上ニ於テモ思フニ
 併國ニ為テ甚損害タル事判然ナリ然リト雖
 歐羅巴各國ノ内北部日耳曼ハ勿論伊太利ハ
 澳地利ト雖モ東洋ニ於テ何レノ地ヲ問ハス尋
 常ノ船舶碇泊所ニシテ便利ヲ有シ其嫌忌スヘ
 キ干戈ヲ動カス事無ク充分國威ヲ張ルヘキ程
 ノ廣土ノ地ヲ版圖トスルノ好機會アラハ損益
 ラ論マス悦喜シテ之レヲ取ランハ必定ナリ尤
 其土地ヌルヤ既ニ相應ノ人口ヲ有シ容易ニ統
 轄シ得ヘクシテ戰時軍務ノ便ヲナシ平時物産

予農業ニ後事シ能フヘキノ地ハ予ノ指シ去
 リ又之レラ他ノ語ヲ以テ云ハ、人民中ニ文智
 ト資本金トヲ只領布セハ速カニ繁盛ニ進歩ス
 ルノ地ニシテ其地位外部ヨリノ攻撃ヲ容易ニ
 防禦シ得ヘクシテ過大ニモ無ク又過少ニモア
 ラサハ土地ヲ云フナリ即チ台湾并澎湖等ノ地
 是ナリ

台湾ハ不健康ノ地ナリト云フ説アレド予
 ナ討台記第八章ニ記セシヨリ事實ナルハ
 ナカルヘシ

ろ

人口并島中一般物産等ノ概畧ニ予カ台湾
 旅行記第一編第一章中台湾ハ一萬五千
 方里ニシテ其内支那領ハ即チ予カ十八蕃
 ト称セシ地ノ西ニ方リ凡十九方里ヲ含包
 スルリヤンキヤンノ溪谷ヲ算入スレハ四
 千二百十七方里ニシテ人口百三十七萬五
 千五百十四人云々トアルヲ見ルヘシ
 予カ四十二号建白ニ説明シカ如ク諸西洋各
 國ノ内北部日耳曼ハ其政體ニ於テハ領地ヲ得
 事ヲ最嫌忌スル國ナリト信ス一氏今日ハ同

同ヨリ其シク牙領ヲ望ムノ國ハ無カレヘシ前
 書船ヲ碇泊所ヲ得ルニ司國ノ為メ今日ニシテ
 ハ最早唯希望スルニアラスシテ至要ノ大事件
 トナレリ之ヨリ先キ千八百六十七年ノ頃東洋ニ
 アル同國ノ商船ハ實ニ些々タルモノニテ殆ト
 皆無ニ屬マシ時ト雖既ニ茲ニ見アリテ今ニ
 ナル島ヲ讓受ノ事ヲ支那ニ示談ニ及ヘリ此讓
 受ノ儀メル支那ニ於テハ大ニ其意ニ及スルト
 雖既ニ之レヲ公然ト否ハノ心ハ無ク既ニ亞米
 州公使ホルリンカム氏ノ適時ノ助言無カリセ

支那ハ該島ヲ讓受ヘシナルヘシ信スルナ
 リホルリンカム氏ハ支那ノ信用ヲ受ケ存チ
 却ノ使節トシテ歐米各國ヘ送ラレシ人ナリ先
 年未タ合衆國ト東洋トノ間ニ蒸氣ノ往復無ク
 曾ラシレヲ人ノ想像セサリシ時ニ於テホル
 リンカム氏ハ若シ支那ト葛藤ノ生スルヒ方リ
 合衆國政府ニ於テハ必ス同所ニ海軍碇泊所ヲ
 要スヘシト思考シ支那政府ニ於テ今ニサシ島
 ヲ讓受スヘキヤ否ヲ合セリ然ルニ當時該島
 讓受ノ儀支那ニ於テ子マサル事ヲ答ヘリ因

近年日耳曼北部聯邦ヨリ讓受ノ依頼アリシ
時モ其迷惑ノ情実ヲ親王ヨリ同氏ニ報知セ
リ故ニ同氏ハ一旦合衆國ノ依頼ニ應スルヲ拒
ミメレハ日耳曼北部聯邦ノ依頼ニモ應シ能ハ
サル旨其事實ヲ以テ回答センリヲ恭親王ニ忠
告セ、爾來此論中絶セリ
予方知ル所ニ依レハ此時以來常ニ日耳曼北部
聯邦ハ台湾并澎湖島ニ注目シ同國ヨリ學術上
并軍務上ニ関スル理事官等ヲ同島ニ送レリ然
レ該地方ノ探索、開港場近隣ノ地ニ止マレ

カ、結局未ダ其目途ヲ果テサ、レナリ又千
八百七十四年七台湾島ノ管轄ヲ棄タル在夏門
領事ヲ同島ニ遣レリ同氏ハ該地ニ到着シ後片
時モ怠慢無ク土地探索ニ日ヲ費セリ而シテ
ニ不日前日耳曼北部聯邦政府ハ前書ノ地讓受
ノ談判ヲ始メシ事巴里新聞ニ見ヘタリ
若同國ニ於テ此談判ニ首尾良キ結果ヲ得ルニ
至ラハ日本ノ為メ之レヨリ甚シク歎息スヘキ
事ハ十カレヘシ句トレハ北部日耳曼ハ支那
ニ日本ヲ蚕食スルノ事ヲ抱ノサレ事ハ倍

飛躍

大

層
 所ト魚凡該地ヲ所
 巧ニナル方法ヲ
 ラ設置セハ自然急テ
 海陸軍ノ堅城
 トナリ漸々同國ヲシテ東洋中武威ヲ振ハシメ
 英國英魯國ト共立スルニ至リ日本ニ對シテハ
 其南方「ミヤコ島群島」ニ迫リ且支那ニ對シテハ
 同國最富饒ナル地ノ関門タル厦門ニ臨ミ南
 國ニ壓制スルノ勢ニ至ルヘシ
 當今ハ各國單身ノ如ク重大ノ拳衝ヲ為スト虽
 其辨白スルルハ臨機心意向フ所ナリト云
 高ニ何物ニ依ラシテ少シクハ所存セシトス

世キニ入レトスルノ會ヲ見ル
 否忽チ之ヲ渴望スルノ意ヲ生セリ吾北部
 日耳曼ノシラ一旦台湾ニ足シ入レシムハ其ノ
 政府スル英明ナルヲ以テ大村西郷ノ為レシカ
 如キ等シキ方策ヲ施シ其勇武ニシテ勉強ナル
 百六拾萬人ノ土民ヲ安撫シ本国ニ悦服セシムル
 ノ方畧ナカルヘカラズ隨テ支那移住人等ノ輻
 湊并其他ノ原因ヨリ人口ヲ増加セシムルノ
 方法アルヘシ全地ノ面積ハ凡一萬方里ニシテ
 每方里凡二百三十二人
 何多里國每方里
 二シテ臺灣ハ尚

多量ノ人員
ノ人員
ケ年ノ内二百三十ニ至ル
至堂ノ人口ニ至ル
ヘシ但シ現今人口志萬人ヲ有スル澎湖島ハ此
計案中ニ包有セス

前書ノ案ニ依リ陸軍ヲ集徴スルニ人口百分ノ

三 經人口中英因ハ百分ノ〇・七八魯國ハ二九〇
伊多口ハ二九九澳他利ハ三〇〇佛國ハ二二一

ハ二部日ヲ曼ノ割合ヲ以テハ兵卒七万ノ

ヲ台湾島ニ於テ徴集スルヲ得スク水夫ハ澎湖

ノマクハ港ニ於テ巨多ヲ得キナリ此マクハ

東洋中ニ於テ日耳曼國ノ集聚セント

スル海軍隊ヲ志クニ、フ事ヲ得ヘシ該島ハ殆

ト天然ノ城砦ヲ為シ容易ニ肩スベカラナル

地勢ニシテ此地ヲ攻襲セシハ乃至甲鉄ノ

ニ艘ニ數挺ノ大砲ヲ要スヘシ殊ニ該港ハ退

危害、憂無ク港内四十艘ノ帆船ヲ安全ニ滯泊

セシムルヲ得ルナリ地位自ラ斯ノ如キノ強勢

アル以上ハ仮令日耳曼海外ニ領属ヲ擴弘スル

ノ企望少シト虽モ該島ヲラ其根本ニ用ヒン

ハスルノ思考ヲ起サシムルニ難シアリシ

ハ、ス、マ、ク、ハ、英、明、ノ、チ、レ、ハ、茲、ニ、看、眼、ス、

飛

七

ら

必定ナリ、斯レ如キノ
 立ラレ、日耳曼
 ハ忽チ亞細亞列各國
 事情ニ助言スルノ形勢
 ニ立至リ自然日本ノ思想セシヨリモ一層強威
 ノ國トナルヘシ亞細亞列ニ於テ日本ノ目途ト
 スヘキ処ハ予カ第一号及四号ノ建言ヲ為セシ
 ヲテ以來他ニ変更スル所無シト信ス前文ノ建
 言書寫ハ所持セサレ氏記憶スル所ニテハ日
 ノ為結局最利益トナルヘキニ依リ朝鮮及台湾ヲ
 畧取セン事ヲ志セリ尚未タ良機會ヲ以テ此
 行ハハト欲セ、必良セナル結果ヲ得ヘ

幸、信スルナリ今日ハ俄令其日算ヲ遂ケ
 ナリシモ人民保護ノ名義ニシテ其所置、要件
 ヲ失ハサリシナリ
 日、於テ台湾ヲ所領トスル、意望ヲ絶念
 シ以上ハ同島ヲシテ中立ノ地ト為シ難キカ故
 支那ノ属地タラサルヲ存セサルヲ得ス加フル
 ニ歐米各國ノ手ヘ該地ヲ決シテ渡スヘカラズ
 而シテ日本ハ交際上巧ミテ尽シ前書目途ノ肝
 要ナルヲ支那政府ニ解シ其意ヲ充分貫通セ

朝鮮ノ事ニ於ルモ其二

於テハ前同様ノ方

策ヲ適用スヘシ古シテ國ノシテ日本ノ版圖ト

スル能ハサレハ近世ノ政體其防禦ノ方法ヲ同

國ニ及ボシ外國ノ襲撃ニ對シ預防セサルヘカ

ラス朝鮮國ハ日本ニ對シ決シテ何事ヲモ為シ

得セル事ハ判然ニシテ而シテ前書ノ如キ進歩

ノ狀ニ至ラハ外國ニ於テ其國事ニ立入りガ

ハ最嫌忌スヘキ所ノ外國ノ其地ヲ所領セン

スルヲ防止シ其ノガ為同國ヲシテ外國ヨリノ

卒ニ對シ日本ノトシ用ユルヲ得ヘシ

シ 本政府ニ現ニ該國ヲ畧取ニス其目胸

ナル是等ノ所業ヲ為スニ反シ或ハ形勢ニ依リ

其目途ヲ達スルヲ得サルト虽氏交際上ノエ

ト况今日本ノ國勢トヲ以テ彼ノ國ヲシテ日

ト存亡ヲ供ンセシムル事ハ今日ニ於テ最モ容

易ナルベシ尤斯ノ如キノ形勢ニナル時ハ日本

ニ實地從屬スル如ク充分ナル安全ヲ得スト虽

トモ寧口現今ノ鎖國其柔弱ニ姿ニシテ或ハ外

國ノ從屬トナリ又ハ從屬トナラサルモ外國ノ

威カニ下ニアランヨリ甚シキ危害

ヲ為テ、ルヘシ
 目下政府ニ於テ此見ヲシテ至重ナリト承認
 セラル、ヲ予自ラ保證セスト虽氏深ク百般ノ
 事理ヲ思慮スル時ハ其肝要ナル事ヲ覺知アラ
 シヲ予ノ信用スル処ナリ實ニ今日ハ将来ヲ熟
 思スヘキノ時機ナリ僅カニ一ケ年中ニハ強ク
 事変生スヘカラス然レモ若日耳曼於テ台湾
 受ノ談判整ハス而シテ歐羅巴州中静謐ナル時
 八全國ノ注目ヲ朝鮮ニ更スヘシ故ニ二十年或
 三
 年ノ後ニ至リテ悟スルモ既ニ晚クシラ

時 本ハ怠慢ヲ悔ヒテ眉ヲ擡メ歎アルヘシ

第...説

亜細亞州各河ノ現今并ニ将来帰着セント
スル所ノ國勢ヲ論ス

ペートル大帝ノ大望ヲ施行スルニ方リ魯國

大ニ勢援トナルヘキ事情ニケ條アリ第一ケ條

ハ同國ノ天然ニ有スル地形ナリ第二ケ條ハ魯

國ニ於テ漸々其幕下ニ服從セシメタル亜細亞

人民等其愛慕ト傳說トニ依リ魯國ノ謀計ヲ助

ケン意ヲカタルアリ

人類ノ歴史記ヲ見ルニ其部ノ人民ハ機會ヲ

飛躍

大歳

得ルヤ否安樂ナル開化也ラ慕ヒ常ニ南部并
 西部一移住セン事ヲ望メリ一曰魯國ラシテ威
 カラ有シ開化セル政府ヲ設立スルニ至ラシメ
 曾テ世界ヲ統轄セシ亜細亞人民ノ助ケラ得ル
 時ハ既ニ衰微ヲ顯シタル支那并奴隸ト降リタ
 ル印度或ハ老衰ニシテ既ニ沈衰スル歐羅巴ニ
 於テ之レト抵抗スルヲ得サルヘシ
 英國ハ其間復令同盟ノ勢援ヲ得ルトモ亞細亞
 州中ニ於テ魯國ノ抵抗シ其印支ノ所領ヲ襲撃
 セラト、ノ際之レヲ防止シ旅ヲ程國カラ盛大

ニスラ得ス亞細亞州中同國ノ地位タルヤ實
 ニ尤難ニシテ今日ハ只漸クニ且領地ヲ保存シ
 能フノミノ國カテリ復令同國ニ於テ其政權ヲ
 支那ニ延及シ其人民ヲシテ非常ノ変ニ充用ス
 ヘキ軍隊ニ編入スルトモ魯國ニ抵抗スルノ日
 ニ方リテハ實ニ些々タル應援ナルヘシ其故ハ
 安南該地ノ一部ハ「ビルマ」國スヘキ地及ヒ支
 那南部諸州ノ人民ハ懦弱并臆病ヲ以テ諛語ス
 ルノ人種ニシテ復令無事ニ練磨スルトニ實際
 魯國ニ對シ決シテ抵抗シ行ルニ至ルヘカラス

飛躍

大藏

加フルニ同盟國ヲ得ントスルセ之ヲ得ルニ難
 キ情實數ヶ條アリ佛國ハ日耳曼國ト先段ノ戦
 争以來疲弊シテ英國ニ黨與スルヲ得ス又英國
 獨リ此舉ヲ計リ能フヘキトハ思想セサルナリ
 何トナレハ是等ノ始計ヲ為サンニハ今日ヨリ
 モ一層壯強ニシテ威カヲ要スヘケレハナリ
 英國ハ富有ニシテ既ニ廣大ノ領地ヲ累積スレ
 ハ新タニ之レヲ求ムルヲ欲セス今同國ニ於テ
 希望スルモノハ靜謐ニシテ其靜謐タルノ際同
 國ノ領地并同國ノ威下ニ壓制セシ弱國ヨリノ

法送ラ仰ヒテ其製造物ヲ作りメシチュストル
 ホルミンハ及「シエフールド」ノ職エヲ保持シ
 而シテ其老衰ニ及ヒタル餘手ヲ充分樂ムニ足
 ルヘキ程ノ製造物ヲ製出スルヲ要スルナリ「ワ
 ルレンスチング」地名并「ウエルリント」地名ノ「ロル
 ド」官名「グリウ」氏及ヒ「ロルド」官名「ミン」ト「氏」ノ盛時ハ既
 ニ同國ノ為メ終世過去トナレリト思考セリ若
 今日英國ニ於テ印度ヲ畧取シ之レヲ保有セン
 トセハ其擔負スル処過重ニシテ自滅ヲ招クニ
 至ルト信スルナリ前ニ云ヘル盛時ノ頃ノ歴史

飛騨式

大藏省

史ニ載リタル兩國武勇ノ雷名ハ既ニ朽ナテ先
年來千八百六十一年ヨリ千八百六十五年迄ノ
亜米利加内乱中賣奴ノ事ニ先祖ニ終ニ其惡行
ヨリ自然ノ理ニシテ千八百七十一年ノ卑辱ナ
ルワシントン^上付條約ヲ取結フニ至リ且極秘ナル
英國ノ困守スヘキ盟約ヲ丁抹ニ及キ尚佛國ノ
比部日耳曼ヨリ攻撃セララルノ際同國ヲ捨テ
加フルニ魯國ニ於テ千八百五十六年ノ巴里斯
條約ヲ廢止スル事ヲ公布シ英國ノ貌ヘ泣ラ塗
ルニ等シキ耻辱ノ処置ヲ受ケルモ更ニ感動セ

ス自若トシテ堅居スル等ノ履歴ヲ殘セリ
現今英國ノ形狀ヲ見ルニ支那ヲ畧取スルノ力
無キノミナラス只各國ト平和ニシテ同國製造
物ノ消費カラ防止スヘキ混雜ナカラシラ要ス
ルナリ此ニヶ年前支那ト同國トノ貿易ハ二億
五千萬弗ニ昇レリ而シテ現今印度政府ノ歳出
并同所植民地保有ノ費ヲ辨償スル鴉片ノ賣捌
ノミナラス世界中ニ於テ漸々保護稅則設立ヨ
リ日々他ノ外國市場ヲ逐斥セララル、処ノ同國
製造物賣捌ノ為メ支那ハ殆ト欠クヘカラサ

飛墨式

大藏省

ノ得意先ナリ昨年「ロンドン」ニ於テ数多豪商人
破産セシハ全ク前ニ云ヘル原因ヨリ生レシ事
疑ナシ英國於テハ若支那ヲシテ中立ノ地ト為
シ萬國ノ承認ヲ以テ戦争ヨリ生スヘキ混雜或
ハ危害ヲ永世保護スルヲ得ハ悦ンテ之レヲ為
スヘキナリ

此情實ヲ以テ考フレハ「ロルドロス」ノ忠告
セシカ如ク交際上ノ巧ト辨口トヲ終尾ノ拙門
トシ魯國ニ對シ印度ノ事変ヲ防禦スヘキハ必
定ナリ英國ノ魯國ニ云ハニニハ亞細亞州ハ歐

羅巴州中ニケ國ニ於テ横領セシハ過大ナリ而
シテ亞細亞州中魯國ノ貿易ヲ英國ニ於テ妨害
セサルヘシ然レ時ハ何故ニ萬國人民ノ最幸福
トスル平和ヲ破ルヤト然レハ魯國ハ高賈ノ國
民ニアラス同國ノ脈管中ニハ未タ旧靴鞣人種
ノ血一二滴ヲ含ミ其斂ハ金囊ヨリモ貴重トセ
リ靴鞣人ハ永ク歐羅巴魯西亞ヲ統轄シ而魯國
シテ于今靴鞣人同國內ニ居ヲ占メリ
ニ於テハ其遠謀ヲ德蜜ニシ機會来ルヲ待ツラ
知リ其間英國ニ對シテハ最満足スヘキ保証ヲ
為シ以テ之レヲ撫慰シ倍其目途ヲ達セシラス

ル一 尽方セリ

魯国ノ最其目途ヲ施サントスルノ国ハ支那ナリ該國ハ老弱ニシテ既ニ衰亡ヲ顯セルナレハ魯国ニ於テ近時ノ軍事ニ熟セシ老練ノ大将ヲシテ支那ニ進入セシムルヲ決意スルヤ否忽チ魯国ノ慈悲ヲ仰カサルヲ得ス故ニ一時他事ニ託言シ全ク土地ヲ所有スルハ一時ニシテ永久ナラサルヲ以テ口實トシ西部并北東ノ州郡ヲ畧取スルニ至ル時ハ容易ニ其海岸マテ併呑シ能クヘクシテ最適宜ナル軍畧ヲ施スヘキノ地

ヲ隣有トスルヲ得ヘシ而シテ西洋諸國ハ勿論英國ト虽モ此舉ヲ防止セント決定スルニ至ル迄ニハ既ニ該地於テ二三十萬ノ支那兵ヲ得ヘシ然ル時ハ此舉ヲ防止セントスルノ決意ニ時ニ適セス無益ニ属スヘシ之レ則實地ノ形状ニシテ魯国ノ目途ハ攻撃ト畧取トニアリ然レモ或ハ問フ人アルヘシ何故ニ今日其隣國ノ守衛ナキ中ニ該土ヲ掠奪セサルヤト之レニ答テ云フハ最單一ナリ魯國ハ未ダ支那ヲ要セナレ之レヲ以ラス然リト虽モ支那ハ常ニ全國

飛翠

大藏省

下ニアノ事ヲ要スルナリト加フルニ魯國
我目途ヲ達セントスルニ方リ支那ヲ一種ノ道
具ニ用ヒコ竇トスル如ハ萬國ノ仇敵ナル英國
ヲ滅絶センノ目的ナレハ我計ル如ハ支那ノ為
ノ最モ利益ナリト此意ヲ證センハ外國ヨリ脅
迫セラル、ノ際平時其異見ヲ竇スノミナラス
戰事ニ方リ北京ニ武器並陸軍教師ヲ送り屢支
那ヲ助シル事ヨリ然レモ若支那ノ魯國ト英國
トノ間ヲ狐疑シ魯支兩國ノ為ノ魯國ニ屬セサ
ルヲ得サハ、考フル也方或ハ河流或ハ海岸ヲ

32
與スルヲ躊躇スレ見ル時ハ同國ハ忽チ支
那ニ其背ヲ切ケ我讎敵ト雖モ之レト合併シテ
事ヲ計ルヲ耻ナス此方策ヲ以テ同國ハ支那ヲ
シテ萬件和談ニ至ラシムルニ魯國ハ斯ク如
キノ方向ヲ以テスルハ常ニシテ少シクモ亦ス
ル事ナケレハ終ニ支那ニ於テ良同國ヲ信用ス
ルニ至レリト信ス然レモ仮令爰ニ信ヲ置クモ
尚魯國ヲ酷シク嫌忌シ且恐ル、ハ必然ニシテ
總理衙門ハ屢同國ノ公使ヲシテ北京ヨリ教
里遠隔ノ地ニアラシメンヲ望メリ魯國ハ

飛譯在

大藏省

支那ノ尚慢ノ意ヲ碎キシ事アリ然レモ是レ
ノ嫉忌ハ既ニ過キ去リシモノト見ヘ仮令魯國
ノ何ナル方策アルモ英國ノ奸計狡猾ヨリモ寧
口同國ニ腹從スヘシト支那人ハ公然ト云ヘリ
諸人ノ知ル如ク英國ノ目的ハ其國ノ貿易ヲ盛
大ニスルニアリ英國ノ形狀ト一般ノ情實ヲ異
ニスル支那ノ如キ國土ニ於テハ同國ノ望ハ如
キ交際ヲ建置セントスルハ容易ナラス加フル
ニ英國商人ト支那人トノ間ニ起ルヘキ爭論ヲ
公平ニ裁判ハルハ實ニ難事ナルヲ我輩容易ニ

知覺シ得ル知ニシテ結局兩國名代人ノ間ニ歎
息ニヘキ爭論ヲ引出シ自然双方ニ於テ不信ヲ
抱クニ至リ然レ而シテ兩國ノ其和熟ヲ計ラン
カ為互ニ可成我意ヲ主張スルニ及ヒ是等不
快ヨリシテ英國官吏ハ最甚シキ請求ヲ為スニ
及ヘリ而シテ其請求タルヤ萬件支那ノ最嫌忌
スル処ニシテ或時ハ帝国内部ノ經濟法ヲ改革
セサルヲ得スト云ヒ或時ハ地方ノ租稅ヲ変更
セサルヘカラスト云ヒ或時ハ貿易ヲ盛大ニ
シカ為メ通運ノ線路ヲ換ヘサルヘカラスト

支那ノ尚慢

支那ノ尚慢

或時ハ英國ノ忌ムヘキ風習ヲ廢セサルヘ
ラフト又曾テ宗教ヲ弘ムルヨリモ貿易ノ為メ
要用ナル探索ヲ為ス傳教師ノ巡回地ヲ廣メ其
課業ニ便ラ典ヘサルヲ得スト云ヒ即チ之レヲ
单略ニ云フ時ハ安寧并幸福ヲ祈望スル支那人
ノ意ニ反對ナル百事ヲ設置セサルヘカラスシ
テ又同国人ノ欲スル萬件ハ棄セサルヲ得ス然
レモ終ニ之レニ逆フ能ハサルヲ知り英國官吏ノ
請求スル百事ヲ書面ニ約諾シ后ニ至リ實際
一ハ此約諾ヲ廢物トスルノ所置ヲ為セリ是レ

シテ新タニ爭論ヲ醸シ支那ノ凌辱ヲ受ル
ニ主ルカ或ハ爭鬪ヲ發生スルニ至リ倍支那人
ノ心中英國ヲ忌ムノ念ヲ増加セリ此壓鎮シ得
ヘカラサル爭議ハ蓋シ英國トシテ支那門ヲ退
斥セシメ而シテ該國ノ鎮靜スルヲ得ルカ或ハ
然ラサレハ支那ヲシテ印度ノ如ク仮令其意望
アルモ英國ニ抵抗シ或ハ同國ヲ妨害シ或ハ詭
欺ヲ施スノカラテ有セサル迄ニ壓屈セシムル
カ其兩策ノ一ニ歸スルニアラサレハ前書ノ事
議止ム時無カルヘシ魯國ハ英國ノ壓制并森虐

海峽

大藏省

ラハク 策ニ於テハ支那ト等シク同憂ス一処
ルヲ支那人ニ示シ之ヲ口實トシ支那ヨリ
数多ノ土地ヲ讓受タリ蓋シ全國ハ支那ノ諺語
ニ云フ梟ノ鴉ニ對シ施スノ所置ヲ為セリ即チ
一旦巢ニ安居シ窺ヒ居テ道路ノ明瞭ニシテ其
抵抗力并損害ノ恐レ無キヲ見テ始メテ同国并
同盟国ノ為メ支那ヲシテ其食物ニセントスル
ハ判然ナリ此引説ハ支那ト魯国トノ交際上ニ
於テ意外ノ事アルヲ以テ其実ヲ證スルニ足
リ魯国ハ一日支那ニ左祖シ他日ハ其最仇敵ト

魯國ニ黨與セリ

魯國ハ支那ヨリテ終ニ逼リテ改革ヲ為サシム
該國ヲ導引スルヲ既ニ知レリ然レモ未タ其所
為ヲ以テ魯國ニ於テ不信ノ所為タリト云ハル
ヲ得サル所アリ何トナレハ斯ノ如キノ所置ヲ
以テ魯國ノ支那ニ遇セサレハ同國ヲシテ服従
セシムルヲ得ス且同國ノ頑固ハ兩國ノ為一大
憂害ナレハナリ此形状ニ至ルノ日ハ信不信ヲ
論スレハ暫ラノ置キ只支那ニ忠告セニハ魯
國ハ我自國ノ為ニカヲ尽スカ或ハ然ラサレカ

魯國ニ黨與セリ

知ル事肝要ナリ然レハ魯国ノ其所為ヲ明白
ナル所條理ニ適當スルヤ否ヲモ又思考スル事
肝要ナリ而シテ我輩ヲシテ云ハシメハ魯国ノ
所為其事實ニ適スルヲ知ルナリ支那ハ獨立国
ノ擔負スル義務ヲ遂クル能ハサルノ證據ヲ日
々顯ハセリ該国ハ老衰シテ無カナルヨリ其自
国領内ノ事務ヲ適當ニ管理スルヲ得サレニ
ナラス周圍ニアル藩属ハ勿論尚其本国内ノ州
郡ト虫モ擾乱ニ各入ラシメ之レヲ鎮壓スルヲ
得ス而シテ若魯国ノ其国ニテ保護スルニアラ

36
ハ英國代テ之レヲ為スキノ姿ニ立至ラシ
メタリ亞細亞州中英魯兩國ノ國勢ハ我輩ノ良
ク知ル所ニシテ其形勢斯ノ如キニ迫ル時ハ魯
国ハ進入スルヨリ他ニ取ルヘキノ策ナリ一ヘ
シ此一事ノミナラス仮令英國ヲシテ亞細亞州
内ヲ退去セシメ同州内ニ魯国獨リ其国威ヲ張
ルモ尚合衆国ト魯国トノ間ニ地位スル日本支
那ノ如キ摺門ノ類アリテ大ニ同国ノ為弱ミト
ナレハ魯国ハ前書ノ如キ所為ヲ施サ、ルヲ得
サ一争明瞭ナリ合衆国ハ現今四千五百萬ノ

華載
大義

人ロヲ有シ魯國ノ亜細亞州ニ於テ希望ス一地
江ヲ得ルノ日ニ至ルヤ合衆國ハ最モ堅實ニシ
テ強カアル國ト成ルヘシ現今其人口ノ増加ス
ル割合ヲ以テスレハ二十ヶ年内ニハ最強壯ニ
シテ勉強カラ有スル歐羅巴人種ナル人口ヲシ
テ一億萬人ノ余ニ至ルヲ得ヘク而シテ尚二億
五千萬人ヲ保有スルニ充分ノ空地アルヲ合
衆國ノ有セサルヲ得サル富饒并威カラ以テ前
書ノ如キ國勢ニ立至リ就中支那ノ柔弱ニシテ
不車ニ因進シ其鑛山ニ有フル不測ノ富ヲ開カ

今日ノ如キ形勢ナリ時ハ魯國ニ於テ思想ス
ヘキヨリモ全國ノ為メ一層困難ノ場合ニ至ル
ヘシ若合衆國ニ於テ支那ノ部内ニ船舶碇泊所
又ハ貿易ノ市場ヲ所有シ其回威ヲ該地ニ及ル
ニ及フ時ハ魯國ノ一大抵敵トナルヘシ之レ魯
國ニ於テハ勿論避ケサルヘカラス此預防ヲ為
サントスルヤ其前面ニ在ルニケ國ノ中立國ノ
助勢ヲ得ルニアラサレハ此害ヲ避ケル事能ハ
ザルヘシ其中立國タルヤ魯國ノ助ケヲ以テ其
其獨立ヲ保存シ能フ國ニシテ而シテ其國ハ魯

画ニ對シ危害ヲ抱ク又ノ充分ノ国勢ニ至ラザ
ル国ナルヘシ 譯者曰支那日
本ヲ指スナリ

魯國ハ決シテ盛大ナル製造ノ国或ハ貿易ノ国
ト成ルヘキトハ我輩一般ニ信セサル也ニシテ
魯國ノ企望ハ其統轄ノ權ヲ歐羅巴并亞細亞中
最富饒ニシテ且開化セル部分ニ及シ同國人民
中高貴并豪商ハ新タニ得タル土地ニ産スル物
品ヲ買入レ得ヘキヲ欲スルナリ同國ノ製造物
ニ於テハ本國并所屬一般ノ人民專用ノ為メ活
上ニ必需ナル尋常ノ物品ヲ製出スルヲ以テ

ニ
ルトスヘシ

支那ハ合衆國ニシテ其國威ヲ同國ニ及ハシメ
ス結局魯國ノ動止ニ有害トナルヘキ事ヲ充分
防禦スルノ国勢アル以上ハ合衆ノ支那ノ貿易
ノ交通ヲ盛大ニスルトモ魯國ニ於テ決シテ異
論ナカルヘシ然カレモ若其貿易上ヨリ支那ニ
於テ合衆國ノ国威ヲ張ル魯國ヨリモ強盛ニ至
ラントスルノ勢アル時ハ魯國ニ於テ之レヲ防
碍セサルヲ得ス故ニ支那ハ外國ヨリノ壓迫ヲ
充分防キ得ヘキノ国勢ニ至ラントスル方法ヲ

大
義
當

設ル事必需ナリ若前書ノ国勢ニ起立スル
得サーハ魯國ノ為ニハ支那ノ片塊ニ分裂スル
ヲ要スルナリ而シテ其分裂セシ地ハ此時決定
スヘキ國カ權衡ノ法ヲ以テ各國ヘ分配セサル
ヲ得ス若シ斯ノ如キノ分配ヲ為スニ至ラハ魯
國ハ支那ノ周圍ニアル藩屬ハ勿論其本國タル
ノ北部及西部ノ地ヲ合併スヘシ残余ハ魯國
ニ安全ニシテ又其分配ヲ受ル他ノ國々ノ為メ
政務上並貿易上ノ利便ヲ為シ加フルニ合衆國
印易上ニ於テモ亦其便ヲ得ルノ方法ヲ以テ平

等ニ分配スルニ至ルベシ
赤洋ニ於テ日六并支那ニ對シ魯國并英國ノ有
スヘキ國威ハ前書ニ陳述スル所、他ニ人類ノ
想像シ及フヘキ所ニアラス予カ爰ニ述メル如
キ一般ノ形勢若其臆測スル所ニ殆ト大異無キ
ニ変移スル時ハ先キニ述タル漸々盛大ヲ為ス
ヘキ合衆國并魯國ノ二大強國ノ世トナルヘシ
抑人類ノ最初ハ家長ノ配下ニ家族ト集リ后チ
酋長ノ幕下ニ種族或ハ藩トナリ又再ヒ帝王ノ
旗下ニ王國并帝國ト結成シ尋テ人情ノ赴ク所

大義

ハ各人自己ノ利益ヲ達センカ為メ自由ヲ得人
 類一般ノ公益ニ及スル所為ニアラサル以上ハ
 何等ノ事ヲ思ハス束縛ヲ受クルノ事無キニ至
 ル時ハ尚一層強大ノ社會ト結成スヘシ前書二
 ケ國ニ次キ第三トナルヘキ國ノ為メ亞細亞州
 中充分ノ餘地アリ即チ日本ハ既ニ各國ニ先チ
 開化ノ道ニ進ムニ案内者トナレハ其強六國ノ
 一ニ至ルヘキ好機會ヲ有スヘキナリ此語ヲ吐
 クヤ予ハ決シテ日本ニ媚ルノ意無シ唯日本ノ
 既ニ着手セル苦難ナル課業ニ奮發從事シ其目

途ヲ達セントスルニ勉勵アラシメントノ意ヲ
 以テナリ日本ハ亞細亞州ノ事情ヲ熟知シ加フ
 ルニ日本語ト支那語トノ間良開渉スル所アレ
 ハ魯國并合衆國ヨリモ大ニ日本ノ為メ利便ア
 リテ支那國內ニ日本ノ國威ヲ擴張スル助ヲ為
 スヘシ
 亞細亞州ニ於テ此大变革ヲ發生スルノ時至ル
 迄ハ日本ハ三カ四十二号建言中詳細ニ辨明セ
 シ所ヲ自途ヲ以テ百事ヲ処スルヨリ其他ニ良
 策アルヲ見ス即チ之ノ單畧ニ云フ時ハ強國ト

ナリ其間可成歐羅巴或ハ亞米利加国民ノ今日
 既ニ保有スル土地ノ他ニ強大ノ所領ヲ得ント
 スルヲ防止シ而シテ又各国ト最厚ノ交際ヲ常
 ニ保存スルノ際各国ノ内ト混雜ヲ生スル等ノ
 富强ニ至ル時ハ東洋ニ於テ最強大ノ勢ヲ為ス
 ヘキ魯国ノ為メ實ニ利益ナリ其故ハ今日ノ日
 本ノ地勢ハ他ノ各国ト魯国ノ所領ワラデラス
 トツク及ヒパシエツトトノ間ハ勿論サガレン島ノ
 為メト虽モ殆ト堅固ナル柵門ヲ為セハ他国ノ
 中立ヲ計ルニ及ハサレハナリ且魯国ハ此柵門

ヲ一層全完ナラシメントノ見ヲ以テ此程サカ
 レン島ノ讓與ニ代ルニ他ノ償物ヲ以テセス寧
 ロ千島ヲ以テ日本ニ讓ルヲ良全ト考ヘシナル
 ヘシ日本ニ於テ北海道全島ヲ開拓シ而シテ朝
 鮮ヲ畧取スルカ然ラサレハ該国ヲシテ強勢ナ
 ラシメ自國ヲ防衛シ能フヘキ国力ニ至ラシメ
 ハ柵門ハ高一層ノ全備ヲ得ヘシ故ニ日本一回
 英國ノ威下ヲ全ク離ル、ヤ否魯国ハ混乱ナル
 支那国内ニ日本ノ國威ヲ擴張セン事ヲ希望ス
 ルハ疑ヲ容レサル所ナリ

慎テ予カ第三十五号書簡ト共ニ之レヲ大隈重
信閣下ニ呈

千八百七十五年十月

リセンドル

5
42

